

## 論文の内容の要旨

氏 名	佐 藤 令 奈
論文題目	「アトピー」をめぐる社会問題の構築と近代医療批判
内 容 の 要 旨	
<p>本研究の目的は、1980～90年代の日本社会においてアトピー性皮膚炎が社会問題として構築されてきたことを取り上げ、1)疾患の治療の困難が社会問題として構築される過程をあきらかにし、かつ2)この構築の一方の当事者である病者が具体的にどのように対処実践を行ったのかを記述し、3)そうした作業を通して「アトピー」をめぐる社会問題の構築が現在の日本社会やアトピー病者に対して持つ意義を考察することである。</p> <p>本稿の序章においては、まず、本研究の問題関心および3つの基本的視座が示される。すなわち、社会問題の構築主義アプローチ、言説分析、病の経験のインサイダー・パースペクティブがそれである。</p> <p>続く第1章は、アトピー問題の社会的構築に関する歴史的背景を叙述する。明治維新後ほどなく、明治政府は医制を敷き、西欧において発展したいわゆる西欧近代医学の制度的導入を図った。国家によって正統性を付与された近代医学・医療の基本的特徴とは何か、なぜ病に関するこの行為様式が人びとの疾病や健康に対して強い支配力を有するようになったのか、という問題は、日本の医療に関心を持つ多くの人が知りたい問いである。さらにここでは、この国における近代医学・医療がどのようにアトピー性皮膚炎の診療に携わったかが論じられている。次に、第2章では、20世紀後半の技術的革新や疾病構造の転換という状況の下で生じた近代医学・医療への批判が取り上げられる。近代医学・医療によるアトピー治療は必ずしも成功したとは言えず、また成人しても治癒に至らない患者が増えて、多くの患者が苦しんだのである。</p> <p>以上の歴史的背景のもとで、アトピーは次第に社会問題化した。第3章では、まず日本社会においてアトピーが社会問題として構築された過程が、特徴的な事件や患者の活動に即して記述される。とりわけマスメディアが大きな役割を果たしたことに鑑み、その言説を分析して、〈文明病〉〈ステロイド批判〉〈ステロイド標準化〉の3つの言説が析出された。アトピーの症状については原因が特定できず、決定的な治療法もなかった。そのなかで、文明化された生活様式のどこかに問題が潜んでいるとする〈文明病〉言説が唱えられ、それに基</p>	

づいた治療が探求された。その後、皮膚科医は、炎症に劇的な効果を有するステロイド剤を処方するようになった。しかし、この医薬品は副腎皮質ホルモン剤であり、その副作用によって患者の生活を破壊したとして、〈ステロイド批判〉の言説がとくに患者やその団体から多量に提示された。これに対して、皮膚科医側からは対抗クレームとして〈ステロイド標準化〉言説が提示された。

第4～6章では、それぞれの言説について内容およびその含意を詳細に検討される。第4章で取り上げられる〈文明病〉言説においては、アトピーが近代化・文明化する社会において生じた疾病であるとの理解がなされ、“文明の除去”としての衣食住や生活スタイルの改善が治療法として推奨された。しかし筆者は、こうした治療のあり方が人びとの生活への近代医学・医療の侵入を意味するとも指摘する。

第5章は〈ステロイド批判〉言説をとりあげ、それがアトピー性皮膚炎に対する近代医学・医療の中心的治療法であるステロイド療法とそれを実践した医師への批判であったことを指摘する。そこでは、医師とその治療とが患者に害をなす存在とされ、患者の側から訴訟が提起されることもあったのである。筆者は、この言説に含まれていた近代医学・医療に対する根源的かつ強い批判を析出する。

このような患者やその団体の批判活動に抗して、近代医学・医療の側は対抗的な言説を構築した。〈ステロイド標準化〉言説がそれである。それは、アトピー治療がステロイドの適切な使用によって完治しうることを主張した。注目すべきは、このクレームに「アトピー・ビジネス」論という内容が含まれていることである。それは、悪徳商法批判を装いながら、近代医学・医療から離脱する患者への批判という意味をもっていた。〈ステロイド標準化〉治療は、従来のパターンリズムの医師—患者関係とステロイドの不適切な使用への反省を踏まえた対応策として皮膚科医によって推奨され、この後アトピー治療をめぐる社会的論争は終息していった。第6章では、この医療側からの巻き返しの言説が一定の成功を収めたと総括されている。

第7章では、以上3～6章で明らかにされた言説実践の経験が病者に与えた影響が検討される。〈ステロイド標準化〉言説の高揚の後、患者や患者団体による〈ステロイド批判〉言説は一見打ち消されてしまったように思われる。しかし、患者の対処実践を詳細に観察してみれば、患者は、自らの病の問題への主体的な対処を実現させている。すなわち、筆者によれば、患者への権利侵害と受動化をもたらしたとして近代医学・医療を批判した〈ステロイド批判〉言説は、具体的な患者一人一人の治療実践の中に、その価値観や治療そのものを相対化するという形で生きているのである。アトピー患者は、様々な主体的な対処実践を展開し、近代医学・医療による全面的なコントロールを回避していると言える。

筆者がこの研究を通して主張する結論は、以下のことである。すなわち、アトピー患者の主体的な実践が可能になるためには、〈ステロイド批判〉言説の展開を通じて近代医学・医療の価値観や治療法が相対化され、患者や市民らが「アトピー」という疾病やそれがもたらす症状や苦悩、困難について自らの言葉で語るといった社会的経験が必要であった。この社会的経験を促進したのは、高度情報化社会とくにインターネットの成立によって、緩やかなネットワークが形成され、大量の情報を一挙に伝達でき、かつそれが長期間閲覧可能になる言説空間が成立したという事情である。筆者によれば、こうした言説空間の活用とそれによる自らの主体的な対処実践という経験を病者に与えることができたことが、「アトピー」をめぐる社会問題の構築の現在に対する意義なのである。

## 論文審査の結果の要旨

氏 名	佐 藤 令 奈
論文題目	「アトピー」をめぐる社会問題の構築と近代医療批判
要 旨	
<p>本研究は、ある疾患の治療のあり方が社会問題となった希少な例を取り上げ、医療社会学的観点から分析するものである。アトピー性皮膚炎は、1970年代からの患者の急増と難治性によって社会問題となり、マスメディアの取り上げる話題となった。時代が下るにつれ、幼少期から子ども時代の病気と考えられていたアトピーが成人期になっても治らない病気となり、しかも重篤化した。患者たちは、激しい痒みや外観の変化を抱え、場合によっては通常の世界生活から退出し、引きこもる人たちも少なからず存在した。生理的失調のみでなく、いわば社会的なそれが重篤化・長期化、そして難治化し、社会生活に障害をもたらし、アトピーの子どもを抱えた母親や成長した患者たちに不安を与えたのである。皮膚科や小児科の医師たちは、病因の特定や有効な治療法について合意できず、てんでにさまざまな考え方を提示し、多くの患者が種々の治療を提案する医師の間でさまようことになった。</p> <p>当初多くの患者たちが治療法を求め受診した皮膚科医は、対症療法であるステロイド軟膏の使用に走った。この医薬品は当初は劇的な効果をもたらしたものの、連用によって使用量が増え、またより強力なものが処方されて重篤な症状をかえって悪化させ、止めようとすれば激しい副作用に襲われる。患者たちは、このステロイド療法からの離脱を図り、手を携え、患者団体を結成して情報を交換した。こうした団体は患者を近代医学・医療の過誤の被害者と捉えた。このステロイド批判は、単一の薬剤や個人に止まらず、近代医学・医療に対する批判として構築された。こうした背景の下で、一部の患者は、ステロイドを多用して重篤な症状をもたらしたとして、医師に対する訴訟を提起した。筆者の指摘するように、医師と患者は被害者と加害者という関係に立ったのである。</p> <p>審査委員会は、当事者の立場から事態を解釈する筆者の着眼を高く評価した。また、筆者は、アトピーをめぐるこの社会的紛争の背後に、近代日本における西欧医療の導入と医療化論をめぐる歴史が存在するとの認識に立ち、その歴史的経緯のなかでアトピーという病の意義を検討している。審査の過程では、この作業を貴重なものだと思いつつも、他方で文選探索が尽くされているのか、医療化批判という文脈に外れて近代医療への高い評価を受け入れている部分があるとの指摘もなされた。</p>	

アトピーをめぐる社会的紛争は、格好の社会問題としてマスメディアが取り上げたのみならず、医療社会学的研究の対象ともなってきた。結核の文化史的研究やハンセン病患者・HIV薬害被害者への差別・迫害の社会学的研究など、個別の病気が社会科学の研究対象となる例はあるが、症状の理解と治療法の選択、さらに特定の医薬品がもたらした副作用という、従来は医学・医療の対象とされた事柄が社会科学的研究の対象となった点で、アトピーは特徴的である。筆者が当該論文で言及するように、多くの研究文献が蓄積されており、筆者の研究は、こうした研究史の流れに立つことが確認された。ただし、再び文献資料の網羅性が保証されていない可能性も指摘された。

筆者は、先行する研究文献を踏まえ、これまであまり問題にされてこなかった局面を析出し、アトピーの社会史に重要な局面を付け加えた。すなわち、患者による脱ステロイドの社会的運動に抗して、皮膚科医側は、失敗例に学びつつも標準治療としてのステロイド使用を継続した。この過程で、患者たちがステロイド療法の代わりに頼ったいくつかの民間療法を、患者を喰いものにする不当な商法つまり「アトピー・ビジネス」だとして批判した。それは、悪徳商法批判を装いながらも、近代医学・医療を受け入れない患者への批判、強く言えば攻撃ともなったのである。アトピーは、原因が不明のまま、近代医学・医療への信頼や忠誠が問われる、いわばイデオロギー的対立の焦点となったのである。

こうして筆者は、メディア報道の言説分析を通して、「文明化」言説、「ステロイド批判」言説、そして「ステロイド標準化」言説を析出する。これらの言説の相互作用や交代の経過は、筆者の言うように、社会問題の構築の典型的なケースと考えられる。とりわけマスメディアを舞台に闘われた言説の対立は、多くの患者を巻き込み、また多量のマスコミ報道をもたらして、それ自体が患者の苦悩の原因となったと筆者はいう。この経過の解明は、マスメディアによる報道を丹念に追い、再構成することで得られた筆者独自の知見である。審査委員会は、この議論が社会問題の構築主義として認知された方法の成功した適用例であり、筆者の理解が充分資料に裏付けられた根拠のあるものだとして認定した。

筆者は、こんにちステロイド標準治療が多くの患者の受け入れるところとなり、かつてのステロイド批判の言説は勢いを失って、この社会的対立は一応収束したと総括する。アトピーをめぐる社会的紛争は、一見近代医学・医療側の勝利というかたちで収束したかに見える。しかし、筆者によれば、それは表面的な状況である。

筆者は、この渦中の患者当事者が公にした8冊の手記を分析し、患者たちがこの経過を通して特徴的な行為のあり方を身につけたと指摘する。手記を丁寧に読解すれば、患者たちがアトピーという病に向き合う際の対処実践は、近代医学・医療の提示する価値観に縛られない、主体的なものになったことがわかる。患者たちは、近代医療・医学の提案する治療法も可能な選択肢の一つに過ぎないと位置付け、自らの主体的な選択によって生活を再建しようとしているのである。筆者によれば、そこには「多元的医療」への萌芽が存在する。

審査委員会は、こうした議論が、患者の手記を丹念に読み込み、そこに現れた行為の意味やそれを導いた考え方を丁寧に検証する作業に依拠していることを認めた。ただし、筆者の言うように患者当事者が「多元的医療」というアイデアを自覚的に追求しているとみて良いかどうか、すなわちステロイド標準化言説に対する有効な対抗クレームになっているのかどうかについては、まだ論証を重ねる余地があることも指摘された。実際、一見しての収束は、ステロイド標準化言説に対する有力な対抗言説が未だ形成されていないことを意味するとも考えられる。とはいえ、筆者の指摘には今後の医療社会学の展開に資する観点が含まれていることも、審査委員会の合意するところである。

本審査委員会は、以上のように提出された博士論文を検証し、かつ筆者自身に補足的説明を求めるという過程を経て討議を行い、当該論文の学術的な意義について合意に達した。